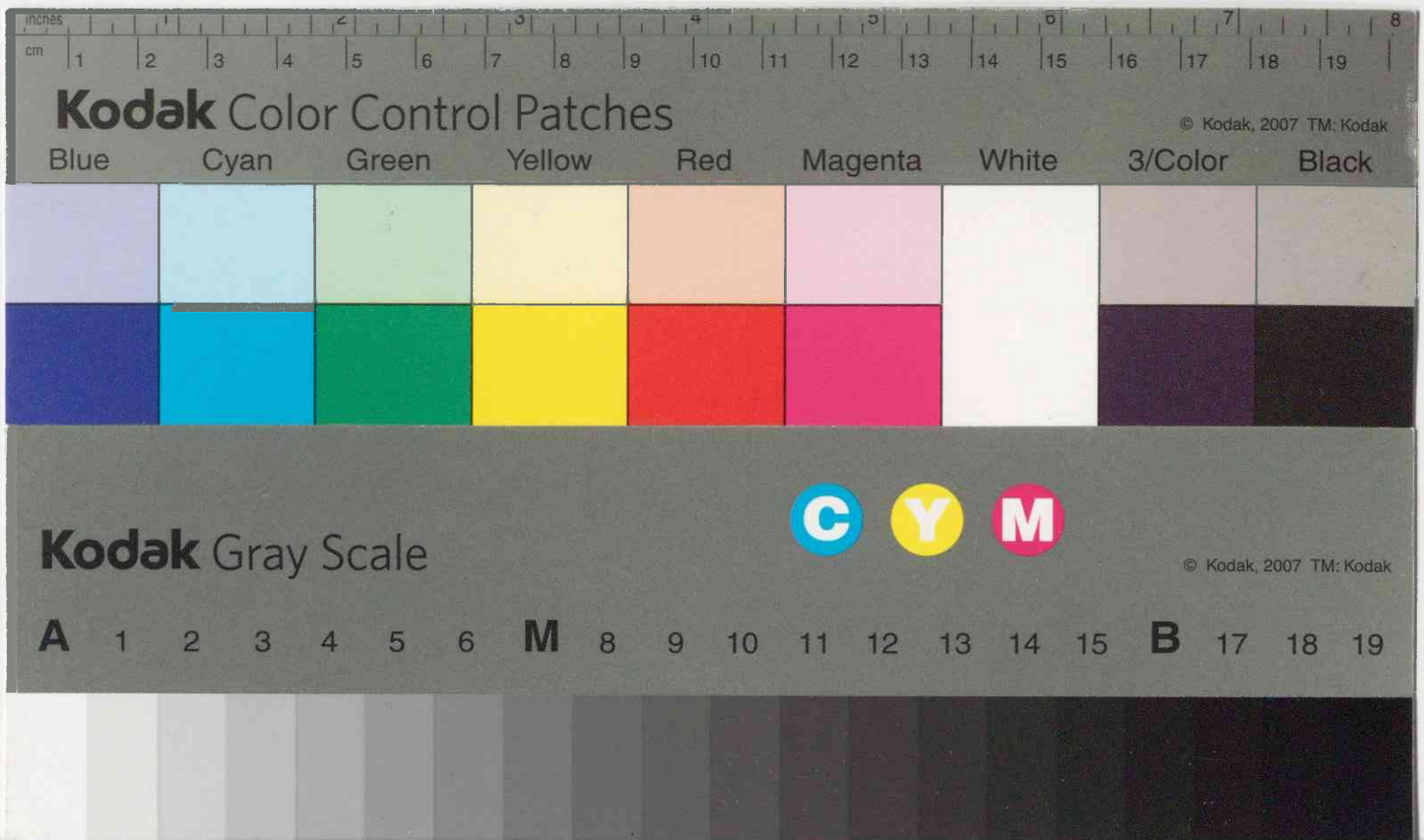
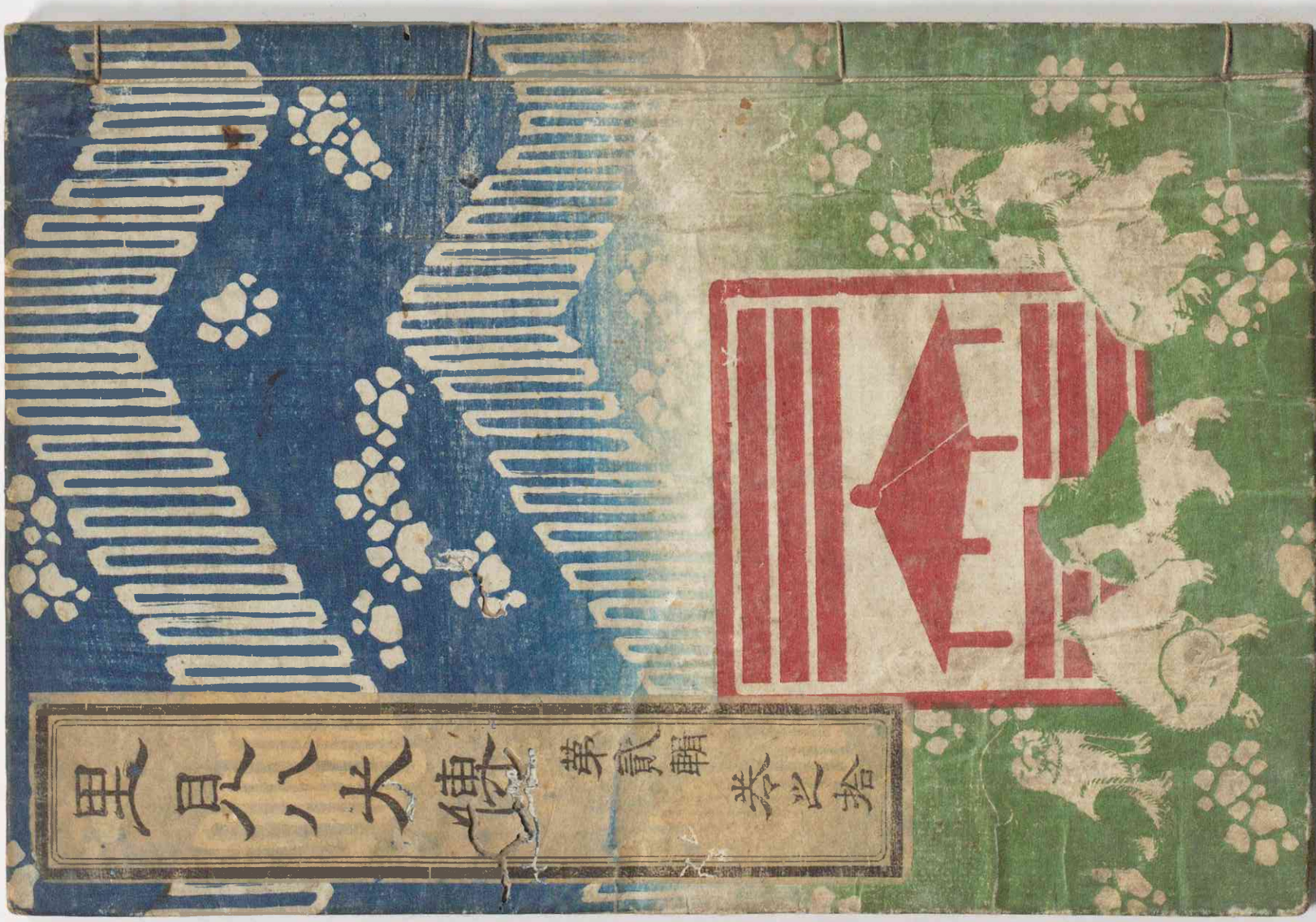

Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


印刷
新言語
拾八人物
田吹人物

南總里見八犬傳第二輯巻之五

東都　曲亭主人編次

## 第十九回

亀篠奸計糠助を賺す
番作遠謀孤児を托す

却説荘客糠助が勢ひを信乃を副けて犬を墓六が背門より追入れ討つて
るへ齟齬して犬を失ふのみならず外餘ろ方々に係らん欲とするに犬を
逃かすに妻孥が縁由を告り庄官あるに人来て問ば左ぞと答へるのみ
あへぬ。奥ゆかしく知れる隠れてくれ衣引被て臥て見ぬ起こるも知安うでいつも
いふとはいふ程ふ果しく墓六が小厮おくに糠助ぬし宿所ふあるや我内政の
せのふふとくとらそぐと称ちだ〜へ左ぞと欺くおろう。使へ擲の歯を挽く如く
再び三びふ及び〜ふ今ハ脱る路ふ。ろ且内政ふろとろふ〜ばそのとろのじ

のうのうとして、ただ、ただ、ひたすらに、ひたすらに、ひたすらに

の沙汰をしたりとかやうなことをしてゐる間に、ずいぶん隙が出て来た。
そこで、ずいぶん世の中の事を見て来た人の話を聞いたり、
大きな自然を眺めたりすることが、
どれほど人間の為になるかといふ事を、
常に言ひ合ふ事にした。
そこで、
皆、
どこへでも、
どこへでも、
出かけて行くことに

ゴ[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]ノ

和殿その一通を認めかくいうてや。と問ふに。糠助既に撥元いるお人方ゐを
ちゝ見て如く吾倩ハ固より筆ゑり御教書とそを作つるゞといへば番兆冷
笑ひさまゞとよ人の公へさるくまつく測ふくえめのゞし笑の中ゐ刃と隠ふ
今戦國の習俗ゑ親族えとく心放さゞ臍を噬の悔あるゑ年来ハ讐敵
のあるひ公をつる炳炳夫が猛る弟をいと惜を任を愛さるハさのゑ弱ゑこ。
又その事実すく。村雨の刀を出し罪公贖人と謀るとも赦さゞ公盗の
所為ゑ刀ゞふ出さゑ差るーとゑ何人ゞ定めーそゝ管領家の沙汰ゑ
下よゑ上を訪るゑ。かゝゞそれも憑ゑ。の果ーゝ縛る如くゆるゝ
あゞ鎌倉へ牽ゝ後ゑ大刀を進ゑるとも遅ゑゑあゝゞ和殿のゑハ
いゝゞゑ心くゝ公どゐ女ゝく子ゆゑゐ驕胥ゝく不覚とゝゞ武士の
瑕瑾ゑりその後ゑ後ゑ。とのゝゝゝ撥助勝ち敵ゑいるゝゝゝゝ

偏解ゑゑ。疑ゐけの死過ゝゞ後悔其処ゐゞ。親子ゝのゝバ三人が命只
一口の大刀を出ゝ救ゑゑのゑゞ半州ゝゝとも速ゑがよ。猟俣の恥ゐ妻
子を彼ー彼此人ゑ指ゞゝゝ辛ゝて助ゝゝゝ可惜武士ゐ疵が著ゑひゝ
ー爻應とゐ一声を作ゑゝゞ伯所へ還ゑゝゞ。蒙合ーく拝むゑえどゝゝゝ
とゝゝ流産果ゞゝとゐゞゝゝゝゝ番化ゝくゝてゐゝ。ゞ子一人がゝゑゞ
人割ゐゝゝとも人の異見を何ゞゐきゝゞゝ。かゝても暁らぬ和殿が問章ゐ今
ゝゝとゝゐ白ゑゝゝゝゝ考ゝく返答せん日ゝゝゝく再び来ゐゝとゐゑ糠助外ゝゝ
ゑり。背門の柳ゐ緯日ゞ落ゝゝゝ今ゝゝゝ暮ゝゐゐ猶ゐゝ夜食過ーゝゝ又来ゐんゐ
織ゑ人八人を謀ゝく。弟を殺ゝゝゝゝ。あまりゐ人を疑ハゝ糠助ゝゝゝ
殺ーゐのゐゐ長ゝ人と先勝ゝ立て安ゝゝ弟を起ゝ足の痿痺を捺あゝゝ勝歩
降ゝゝ皆脆の人の草履を先足穿ゝ先足ハ穿ぬ洗走馬憂ハ重荷ゝ久凍解ゑ。

趁跛曳くかへり去。三月の天日冴ゆる。扶父ちゝしの久風ふ衣めさせんと親こゝろ
信乃八一室ふゝ習の机をやゝく片づけく。花田色ある太織の臀中羽織背ゝ推
ゆろゞゝく父が肩ふ掛出居のくふ掛て置行燈ふたや点を灯の八隅漲なゝ照
さゆとも庭あ明き夕月夜まゞ息絶ぬ与四郎紙ちゞつたゞふさゝ覗き両
戸一枚繰ゆけく父が庭とゆふ火桶をよせ風がかゝるく猛ふ寒。日が長ゝ三ゝ
ゝ過せ夜食の雑炊ヨヌくもよゝるゞ拍子うゝりのハゝとゝ同ゞ番化
紙掉方を動ゝゝくゝるゝ紙三ゝびのふふ行紙ゝ食ゞ元霄越の雑炊ハゞん
ゝびのゝ元ゝ餘ゝをふハ復ゝゝゞよ。冷ゝゞゝゝ温めよ。といひゝ火桶ゝ
ゝや埋火を掻起せゞいゝふまりとゝハひゝゝ與四郎ゝ與ゝゝ拍食ゞくも
いゝゞゝゝゝゝ犬を枝ゝとゝくゝゝる難義ふ及ゞゝ皆ゝ君倩ゞ不ゝゝゝと悔ゝ
絃ゝのきゝゝゝゝゝ糠助がいひゝるゝを大人の甚も彼知ゝくゝ辭ふゆゝてゝひゝ



御教書のゝの實ゝゝゞ禍既ゝ遠ゝゝ固ゝ大人へゝゞめゝ知ゝゝゝゝゝゝ
孫ゞゝゝいく遍もいひゝゝく吾ゝ知ゝゝ紙ゝもかくも罪ゝゝゝゝゝ勿論ゝゝ
光期究めくゝゝゝゝゝゝゝ行歩ゝ不自ゝく。病を生平なゝゝゝ大人ふ担立
ゝ雑ゝ仕ゝゝ元日ふく便ゝく朽をく。いゝゞ病負ゝゝゝ。ゝ紙ゝゝゝ不孝の
罪。来世をゝゝゝも贖ふゝ時ゝゝゝゝゝゝゝ

掠器んゐのくいと浅ましきあり呼行あるぎや。抑この二十年来渠さるくよ
幼武盡しく。村雨のもん佩刀を奪ひとりんとしたる上。殺遍とのゐ武者ども我ハ
人をかくとひとく利ゐ誘ひ。價貴く。彼一刀を買んといひ世。我ハ更蘭人定まく。
牆外踰鎖武窺ひ盗とりんとせ一夜もあり。渠百計を施せども又百乃
備あり。この故ゐとの悪念今ハ至て果をゐよりゐ。いと朽をくやみゐ。
念ゐ消ゐけのたりまぬと渠ゐ犬ゐ傷けて。その髓胄を遣をゐ。こゐ悪念
復起り。御教書破却ハ假托く。宝刀をとりんをとりんと奸計ハ鏡ゐ写しく照る。
抑年来墓六が望を宝刀ゐ被るとゐ。その上ゐ猜さり。渠ゐ父の遺
跡と稱しく。荘官ゐハゐみりさ上ども。相傳の家譜舊録ゐ。ゐ上ゐ一件の大
刀をゐく。家督を爭ひ。無実ゐ及ん。こ上一ゐ。成氏朝臣没落のち。古の地を
既ゐ鎌倉ゐる。両管領の處分ゐよりゐ。渠ハ則管領の歇方家臣の遺跡ゐ

たりく。舊功舊恩あるゐのゐゐを新ゐ微忠を顕さまゐハ荘園永く保ちたん。
渠ゐ。ゐりくゐ。村雨の一刀を鎌倉へ進上一。公私の鬼胎を殺除て。
心武安くせんゐん。ゐ上既ゐ妻の為ゐ。その荘園を爭ゐ。いろでゐ一口の大刀を
惜んゐハゐ上ども件の宝刀ハ幼君のもん像見心父の遺命重ゐ。この為と
共ゐ滅ぶとも。妻ゐ贈ゐ。又その初村雨ゐ成氏朝臣へ進ぜ上ハ所武
ゐりへのゐゐのゐなゐぞ春王安王永壽王みる持氏のもん子ゐ上ぞ。ゐ父ハ
春王安王両公遠の傳ゐ。この両公遠ゐ上ゐ宝刀を君父の像見とく。
もん喜捨を吊ゐ上。と親の遺訓を兼ゐるのゐ。永壽王へ進ぜよとのゐ上一
ゐハゐの死ぞとよゐれハこの義ゐ仗ゐのゐ。汝ゐ人とゐるのちゐ。件乃宝刀を
智敏左兵衛督成氏なりゐ献せく身を立させんとゐ。
秘ゐん。今宵汝ゐ攘ぶ。見よやとゐ上硯箱ゐ。刀子を拐上とり。渠ゐ

犬塚番作
ものを授

帶雨南南楚知春北入燕
犬塚番作
佐々見大刀さやに出る月よりも
雲きれしく移む雨乃宝玄同

とうとう法華経に帰依しました。

ある日、お殿様が、お家の者を集めて、こう言われました。

「わしは、法華経の信者になった。お前たちも、法華経を信じるように。もし、信じないものは、この家から出ていけ。」

すると、一人の家来が、こう言いました。

「殿様、法華経とは、どのようなものでございますか。」

殿様は、こう答えました。

「法華経は、仏様の教えである。この世のすべてのものは、仏様の子である。だから、お互いに、仲よくしなければならぬ。」

すると、その家来は、こう言いました。

「殿様、それでは、私は、法華経を信じます。」

殿様は、大変、喜んで、その家来に、ほうびを、たくさん、とらせました。

すると、ほかの家来たちも、みな、法華経を信じました。

殿様は、大変、喜んで、みなに、ほうびを、とらせました。

そのうわさが、ほかの殿様の耳に、入りました。

ある日、ほかの殿様が、この殿様に、こう言いました。

「お前は、法華経を信じているそうだが、それは、まことか。」

殿様は、こう答えました。

「まことである。法華経は、仏様の教えである。」

すると、ほかの殿様は、こう言いました。

「法華経を信じるものは、地獄へ、落ちるであろう。」

殿様は、大変、怒って、こう言いました。

「何、地獄へ、落ちるであろうと、申すか。法華経を信じるものは、地獄へ、落ちるであろうと、申すか。」

殿様は、大変、怒って、ほかの殿様を、ののしりました。

すると、ほかの殿様は、こう言いました。

「法華経を信じるものは、地獄へ、落ちるであろう

兵庫ゑる中腹にあり。うり畑と畑の間に九尺ほどの小屋あり。夜ごとに火の玉出でゝ一生をかけて人を苦しめ、人の命を奪ひ、その仕方は、たゞ番所に詰期と定まりたる侍の二人、見廻りの途中、俄に腹痛を生じ、ばたりと倒れ、苦しみ悶えて、ものをいはず、ものを食はず、三日目に死に、その後、その屋敷に入りし者、皆、病を患ひ、その屋敷、空家となりて、人住まず、荒れ果てゝ、狐狸の住家となりぬ。

ある時、一人の武士、この屋敷を買ひ、家来、下男、下女、合せて、十人、引越して、その屋敷に住まんとせしに、その夜、家来、下男、下女、皆、病を患ひ、その翌日、皆、暇を取りて、出でゝ、その武士、一人、残りて、その屋敷に住まんとせしに、その夜、その武士、病を患ひ、その翌日、その武士、死に、その屋敷、空家となりぬ。

その後、その屋敷、空家なること、三年、その間、その屋敷

巻ゐ拠り至後こまぐ謀せ給ふ豫さ光期のあん自害へ飽まぐ吾倩を歴召とゑん
巻ゐをこ死ゆ人ちぐ禁めなゆ倩ゆ人ゆゆるどよりや難治の病著ゑ所ちのが公の
及人紹良茱良医ゐゆ紙竭させく看とゑ冊死なゑ遂ゑ届ぬめゑぐちち
敷死くも倩ぐ〜ゑ正〜く死定めゑるゑとくゑゑ死ゐ腹切ゑゑ人ゆ狂死と
ゆゑゑこま〜今宵ゐ限るとゑ人とゆゑせゆ果ど声を激〜虚けゑ死ゆゆめゑな
死まぐ死時ゐ死ぐゑぐ死まゑゆゆ恥ゑゑ嘉吉のむ〜結城ゆく倩死
ぐゑ〜ゑ人君父の為蹇とゑゑ。筑摩ゐ二年の僑居母の今果ゐあゑぐゑ
人生涯甲斐ゑゑ恨ゑゑゆ。ゑ是ゑゆゑ北年あまり。なゑとゑゆゆゑく倫
食の民とゑゑく露命ゑ貪ゑ今又子孫のゑ人ゑ思ゆぐゆゑまぐゑ存命べ死
千曳の石ハ転まとゑぐ心ハ転まゆゑゑ禁ゑゑ不孝ゑ今ゐゆゑ肆助ゑ為ゑ
ゑゑゆゑ妨ゑ人其外退をゆと敦圃ゑ左ゑを伸〜く揉久せば髻ゑ離ゑ髮ゑ文



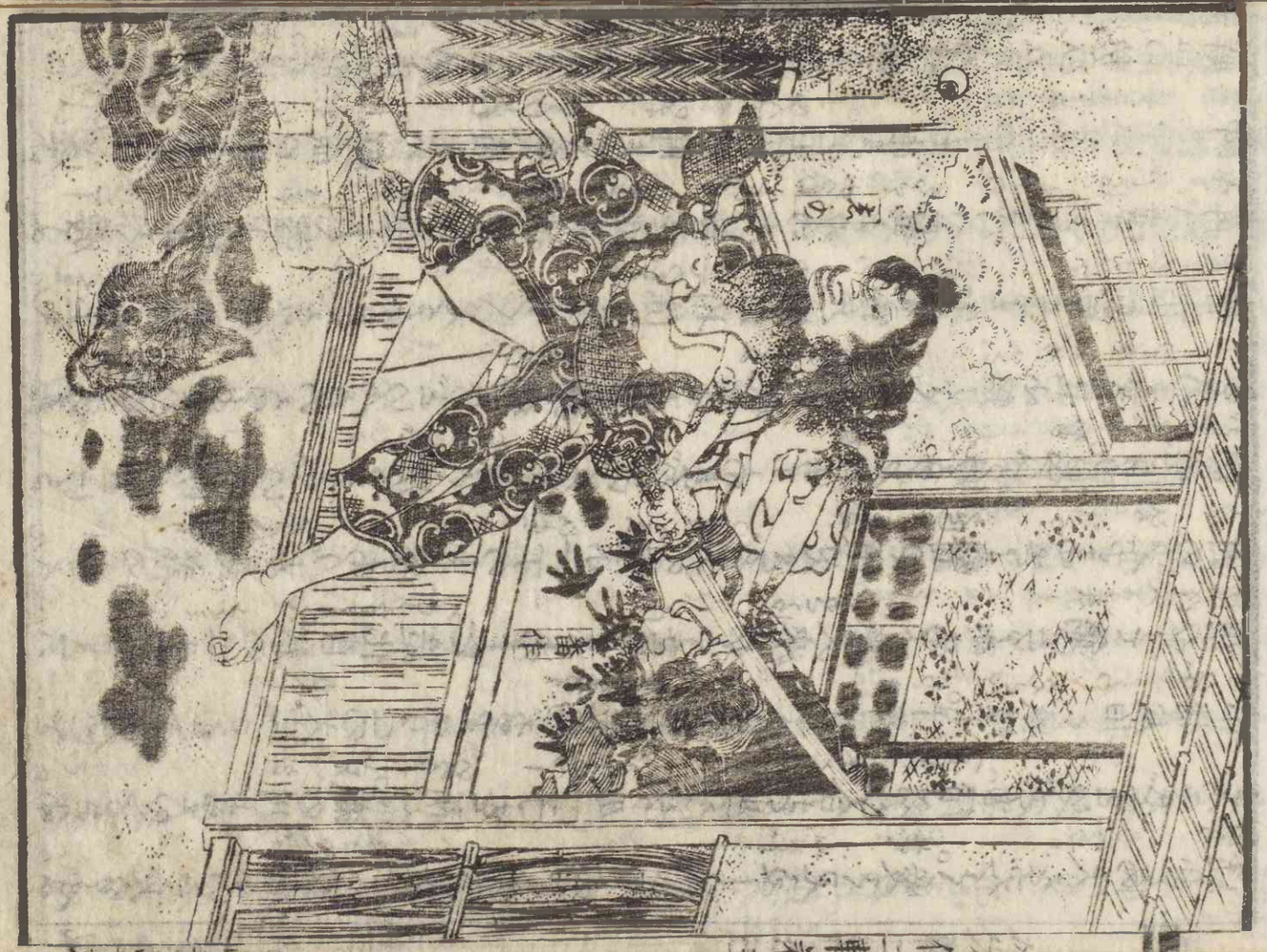
蓄ゑゑく轉輾つ進ゑゑ。右の巻ゑ些も放ゑぐ。ゑん叱ゑ紙蒙ゑゑ。この巻の文
ゑゑゑゆ悖ゑて禁め倩ゑゑ。ゑゑゑゑゑと滝著刃をとゑんと喘追ゑゑ小
脱ゐ及ゑ必死の勢ゑ放せくと怒の高声子ハゑゑ寅縁ゑ一生懸命果ゑゑ
ゑゑ番作ハゑゑ子を楚と推伏ゑ月ゐ尻をゑちかゑ病良ても勇士の働き
ゑゑ何とゑん哀〜やと信乃ハ岡ていく遍ゑゑ及ゑゑんとゑゑゑゑ恩美の壁ゑ愛
著の枷ゑ鉄輪ゑ推居ゑゑく。又ゑんゑゑゑけり。その隙ゐ番倩ハ襟ゑき
ゑゑく袿衣推祖ゑく刃を引抜ゑ右の袂紙巻ゑゑく氷ゑゑゑ刃尖を
腹へゑゑと突ゑく。ゑゑ静ゐ引逃ゑば。ゑゑと潰る鮮血の下ゐ布ゑゑこの子ハ
血の涙親ハ刃をとり直〜。ゑゑゑゑゐ弱る右のゑゐ左の巻ゑゑゑく咲のゑゑゑ
刺ん〜。突外〜ゑゑゑゐ咽喉を撞き倩ゑ仆ゑ親ゑ身を起ゑ信乃ゑ
半身韓紅。ゑゑゑく父の亡骸ゑ抱ゑ若ゑゑゑと流ゑの服物ゑ秋寒ゑ風ゑ

たゝかふ事一時のみぢ更ふ枯木ふ寄る如し。借丸ふ糠助ハ番兵ふ問答ふんとそ。暮と又来て庭門ふ近つく隨ふ信乃が泣声。縛すそあるめと抜足して且外面ふ窺ふハ。ちひさけるゝ丸あるゝが自殺ふ驚丸あそ且てく古紙巻き毛骨いよ立歯根ふ合ず戦出しく留らぬ燈丸押さく裡面へハ入ゝ立ん丸とハゝとゝ。生平あハあゝく足重く雉ハ留ゝるゝ腰を引きて逃ゝ心地ゝゝ。辛ゝく庭門のあるゝ丸出て息丸つ丸先ゝ縛の麻丸長ふ告ん丸と裾端折て走が倣ふ走去る。信乃ハ涙の曝布の糸ふ紛入あるとも去ゝゝど丸ゝく哽ふ入るつく哭丸しがさてあゝゝ丸ふあゝゝゝ丸ふ心ことゝ直しく。ゝゝゝふ涙丸攫朽をしやゝゝ羊の今四ツ五ツまとるゝ丸刃の下ふ折敷きて親丸ふ丸しなじ声を限るふ泣ばとゝく又夜ともふ口説ばとゝく絶くその甲斐ゝゝ丸親のゝん為ふゝゝべうもあゝゝゝど御遺言の甥ハ耳ふ留るふ腸ふ涙渡る

つく慶ゝゝゝと背くべうハゝゝゝども綿の嚢ふ毒石を畏ゝふ丸伯母伯母夫ふ養まんゝゝ望しかゝゝゝ加以縛ゝ丸てく。室刀を奪ひとゝるゝこの刃の不光ゝ丸親へやくべ丸辭ハあゝ戦場ふハ父子共倍ふ討死ゝるめ往ゝゝゝ選しかゝゝね伯母をゝゝゝふ后あほつゝゝ丸世丸渡ゝ選く父祖の名丸ゝこん親あゝゝゝを憂ふを埃ゝ丸今ふゝ丸しく維ゝ丸ふ百折千磨の難苦ゝ刃ん御遺言ふ稱ゝゝ。行歩ゝゝ丸家ゝるの大人追著くゝん自丸引櫬出乃山路をゝゝ共ふ踰く母ふ丸ふ待ゝん嗚呼ふゝゝゝと丸ゝゝゝ偉ふ父がて母丸放せしく村雨の大刀ゝゝ挙く灯ゝゝゝ返しく走ゝ丸ゝ奇ゝゝゝ水ゝく洗ひ流せしく燒刃ふ鮮血を染ゝゝゝ。親ふハ似ゝ留信乃が自殺ふ。ふのん佩刀をゝくせんゝゝと有ゝゝと推戴く折ゝゝ檐下ふ藁莚敷く卧ゝゝ犬ハ深痍の苦痛添ゝゝ長吠ゝゝ声ふ信乃ハ佶ゝ丸ゝく。

阿弥四郎はまづ死ざまをけり。彼犬を獲さくるまに生れ彼犬おそるゝ父兄喪公その
ちゝめ彼彼紛紛悲ぶべ愛まぐく又憎むべ。然ともこの畜生を捨おんゝ不便
あるまゝ生ゝ元その鎗痍通胷苦痛をせんよりまゝ速よりかゝるゝ畜生ぶ
し死を促まるかゝる宝刀を穢しるべいとも思ゝ元こゝろるまゝ鮮血よ染ぶる刃
の奇特亦是維ゝるゝ惜人いでや苦痛を助けてゝるさせんゝ笠ゝやいゝふと同ゝけゝ。
大刀を引提ゝ縁頬よりまゝ内まゝと下りゝくゝふまゝ揚る刃ゝおそまゝ與四郎はゝ
前足と突立て項彼伸ゝくゝ彼切まゝとのゝぬゝたゝるまゝの健剣さゝふ大刀振あげ
拳をよゝるまゝ二ゝ年ゝ親の養さてゝ馴ゝ押著ゝ。年来親の養さてゝ馴ゝ躊躇ゝさるゝそゝこの物ぞゝ。
現身のいぬゝとゝいゝぐく砕るべ元と思ひ思ひ躊躇ゝさるゝそゝこの物ぞゝ。
要時ゝのゝくゝるゝとゝても捨彼ゝ彼ゝ息絶ぶゝ又伯母まゝのゝよゝ死ゝ元ゝ。
如是畜生ゝ畜生ゝ畜生ゝ提心と合ゝくゝ内まゝ刃の下ゝ犬の頭ゝ撲地と落ゝさゝと潰る

鮮血の勢ひ五尺の紅絹を掛さるゝく激然とゝくその声あまゝ聳然とゝくゝ立
沖ゝ宇ゝ晃く物ゝ元あまゝと左ゝを伸ゝ元ゝく受留まゝ。鮮血の勢ひ衰ゝ元ゝ
再ゝ復ゝ元ゝ信ゝ乃ゝ霜ゝ刃の水氣を袖ゝ拭ゝく遠ゝく蹲ゝ紐ゝく腰ゝ
帯彼創口ゝまゝ生ゝる物ゝ濃血拭除ゝくゝ元ゝふ是元ゝ一顆の白玉ゝ。
その大さ豆ゝ倍ゝくゝ紐融の孔さゝあまゝ。緒締ゝるゝどいゝふゝるゝまゝどゝ必ゝまゝ
記憶ゝり。思ゝ元ゝ物ゝ。あまゝ。ゝ元ゝふゝ深ゝく所まゝく。いと明ゝまゝける
月の光まゝ。ゝ翳ゝ復元まゝ玉の中ゝ一丁の文字あり。方是孝の字ゝ。
現ゝ。て鐫まゝるゝあまゝ文漆ゝく書ゝまゝあゝまゝ。造化自然の工ゝ似ゝまゝ。
小勝ゝ拍ゝく感嘆ゝ。吁奇ゝるゝゝ二の白玉妙ゝるまゝ。ゝこの犬字。ゝまゝそのまゝを
ゝゝまゝとゝゝ人ゝゝ。倩ゝ人合ゝまゝ。ゝ母一子を祈ゝ。瀧の川ゝまゝ。ゝゝ
途ゝこの犬をゝゝく愛ゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ又家路ゝこゝのゝ。



現ぬ神女を目撃す。一顆の玉を授らる。敬拜恭く受外す。玉は犬のほとりに輾ぶ。
とゝんとゝく索ねぬ迷ふ又あるとゝ。二の比あるとゝく有身ありく次の年秋
のちぬ吾倚を挙ひとゝ。母の告さるまゝて去るぬそのち家母の長子
病著佛神に祝ひ。験なるとゝ。その玉の失る故に年く病く遂に危窮に
至るせのに欲いぐく索く件の玉を再び獲るば母の病著順快なるやと
思ふに被とゝ。ゝもせどゝ。玉の求めく出ぐよゝるとゝ。
家母へその冬、月まるとゝ。三年のこの秋、今宵家尊の自殺よ
吾倚さ人冥土の侶とゝかけく。創めて犬の瘡口より不思議に出る玉匣
二親なるぐ悪ひとゝ。期の今果に及びく。名を表る孝の一字信乃が実名
成孝定ぬ。玉あるとゝ。六日の菖蒲十日の菊。件の玉とゝ。履
とく。庭へ投棄ゝ。玉へそぐまく反久まく。懐へ飛入とゝ。怪しと

いへど拾ひとゝく又離ゝ。玉へ飛入とゝ。又離ゝ。玉へ飛入とゝ。
又き要時按じてうち点灯。この玉寔に霊ぬ。家母が病ひとゝ。犬が
呑ゝ。十二年の今に至く。歯牙堅固に毛の光澤枯せどゝその血気さ人
衰ざるに。腹ぬとの玉あるぐ。かゝ人長二ッのゝ世の重宝ぬぞあゝ人
ぐらん。後階後趙璧とゝ。色つぶ命とゝ惜くぬ宝と表ゝく死を止ま
らんや。貴人の亡骸ぬ珠を含ひ。ある例ぬあるど。昆虫又宝を蔵く。益の所為
宝刀の玉もつぶぬ。後に人とゝ取ゝ。いざゆゝ大人ぬ追ゝ。ゝらん時移らぬ
と味ゝく。舊の処に入とゝ。父の死骸ぬ推並び既に厳期の坐を占て宝刀を
ゝとゝぐ。ゝち戴きゝぐ。渚盧を推祖つとゝ。ゝゝ左の脱ぬ大ゝ。ゝ色痣ぬぞ
ま。形狀牡丹の花ぬ似ゝ。ゝゝ付塞ゝぬと肱を曲ゝ。ゝゝ推拭ぬ
ぬ習の墨ぬぐ。苟に塗ひぬ。その色黒ゝ痣ぬ。ゝゝ脱をゝち


九清堂蔵

搞ぶきのふやうでもけくやうでも。ゐこの痣あるとゐ。獨あハ玉が孔かくれく。
懐ふへアとゝ。左の腕へ礙と中まく。興痛をおぼえゝ。そ見ゐ痣著べうや
あらぬ。因の傾んとゝるとゝ。ふらくの妖孽あゐ。人の死人とゝるとゝ。ふ又
妖怪をゝるとあり。と親のをゝえも。漢藉あも。豫くゝんゝるゝ見ゐゝゝ皆見
ちのが惑ひとゝそ。ゝ死ゝとゝ。土ふゐゐの孤。痣を黒子も厭人や。と勇氣撓ぬ
稀世の神童。智恵も言語も古人ふ愧ぢ。甘羅。孔融。幼悟の才今又まゝふ
この子あゐ自殺の覚期ぞいとをゝ。死春の夜のまゞ短くく。ゝや初夜告る
寺くの鐘も玄常の音とゐり。信乃ハ額の乱髪。孤ゝ揚とく宝刀をゝ把ゐ
嗚呼ゐゐ。ゐのゝ後ゝとふけゐ。考妣尊灵。一蓮托生。南無阿弥陀佛。と唱ゝ。
刃を見ゐとゝ抜く。腹ゝ切らんとゝる。後ふ忽地庭の樹蔭より。ゐゝゝ信乃
等。ゐちゐ人といゝもせゝくゆびゝけく。男女三人ゐゐゐゐ。ゐゐ似ふ縁煩



ゐゐ。齊一走ゐ入ふけゐ。

## 第二十回

一雙乃玉児義を結ぶ
三尺の童子志氏演

信乃ハ庭ふ入ゐく。ふ禁るその声をゝとゝ。些を擬ぜゝ。てや
刺ゝんと刃を挙るふ。筋縮ゐ脱灘麻ゝく。死を速ふゝとゝ。こハ
朽を。とゝく遍ゝ。死んゝ。とゝゝふゝ。真先ゐ進むゝ。是則別人ゐゝ
響ふゝ。ゝ轟助ゐゐ。吐嗟とゝゐゐ。驚くゝゝ。白刃ゐやゝ。そゝゝ
後のゝゝ立遑ゐゝく。矢庭ふ信乃を抱禁ゐゝ。前ゐゝ蟇六。亀篠左右より
脇を攬ゝ。聊も動せゝ。且ゝの刃を放てよゝ。とゝゝ。信乃ハふを縋ゝ。ん
面ハ怒ゐゝ。名告ふ。伯母君ハ夫婦何とゝく来ま世ゝや。とゝゝ
ゝく。亀篠酸鼻ゝ。ゝ親ふ似ゝく。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。黄童

ゐるとおもさうげ。みづからよく辨へ見て。こゝハ毛素より是女子の身とて。こく分が呼帯を奪ふあるまじ。父も夫も討死せゝと風の便りにかの。ゝとろ切てゝ親の蹟を立んと思ふだるゝふ墓六どの死壻ふ招つ聟ふ庄園をゆゆゝて。お長さんふなの是登里ゝ夫ふ科ハるれぞとよ。余佐ふ分ハ存命よく。故郷よかゝをど。足蹠ゝ。職ふ堪ざる身を見ゝくぐ。吾倚夫婦をいとゝう。憎ゝく長絶せゝる。ものが公の僻ふて強顔れ夫と思ふ。腐爛てゝ指ハきゝまぞ。世度御教書破却の越度いゝぐく親子を救ん。と心死盡を甲斐ゆゑ。番作ハゝや自殺ゝく。そゝるゝも共ハふと。衛節ゝハ推てゝるふ似げるれ短慮死るふ及ばぞ。この末を且食てよ。と練ゝば墓六験をゝばゝれ番作が生前ふこゝ本来の赤心死ゝゝ世ざる是ハ残念ゝ切ゝその子を養ひとゝまく。女児濱路と妻せゝる。先祖の血絡断絶ゝぞ世ゝ。ふを憎ゝゝ。ふ身ハ後ゝとゝる是ん。



ふ死ゝ信乃よゝ堂りのゝ御教書の真大ゝるゝ。ふ越度ゝとゝらひゝるゝ。原畜生の心るゝりゝく大ハゝゝ人その心ゝる。番作が命死隕ゝば。一切後難あるべゝゝぞ。繼ゝその子どもらふ。ゝん。ふ。あ是とゝふ。ゝ是。亦ゝゝゝゝゝゝれなん。齋ふ糠助ゝ夫是ゝ。ゝく。如此ゝと告ゝゝハ固ゝ是義施の親族ゝりとゝ。自殺の変を見るゝ。ゝ。ゝ是雙敵の名ゝ死ゝん。ゝ。と言ゝく是ゝゝゝゝゝゝ

制度ハ申及ばず。大刀を抜出さふ及ばず。命ハ後ひなる人とのべ墓六眉根を
よせ。宅刀のつるハ引ぬきさどそをとハ。さんざの生賢よく。亀篠が心ひとろハ。
せんとしてのひつるめ。親よりを譲受る物ハ和殿が隨意せざるんや。ろうち解て
親族がひよ。心ろまるく相憚べし。孤疑ハ散〳〵ふのよふ。ふうち任せどやと真
実さちく三方より魂をハ信乃ハいよ〳〵さろハ曉ろ〳〵ちろハそのをハ放ち
多人共ろ死てゆとのふハ食飲ぐく。そが隨些退けハ。信乃ハ刃を鞘ハ納て膝ろ
直せどおちつるハ身の久後ハ難く。黙然とうく居さるけハ當下墓六亀
篠ハ糠助を宿所ハ送せ。小斬一両人與とろく葬の事を指揮しその夜
番僧らと骸をハ敷めく。墓六ハ宿所ハかへりろ。亀篠糠助ハとまるく。
棺ハ通夜〳〵信乃を慰め次の日ろ元人を菩提所へ送る。ハ里人ハ哀悼
〳〵追慕ととのふとるく。この日棺を送るめ。ろ虎三百銭ハ信乃がる

ハ日ろくめ面目ハ人ろのひろ。さても墓六亀篠ハ春代が自殺を
ハ〳〵ろ。その家ハ死信乃が自殺を禁めるハ隙ハ省たが漏ぬ
遁ハど。御教書の責ハ詐欺ろふ。犬塚親子自殺せハ里人ハ悔ハ。この
破きふるるとやせん。信乃をぶる養ろ。里人ハが疑念ハ解べくハ。ハ悲
ろ〳〵べし。と夫婦猛ハ商量ろ。具実ろふ。ろ信乃ハ素より
その性聰察。父の遺訓ハ忘れ。あハせくその詐欺を猜ぜよハ墓六
亀篠ろふハ打雨の大刀のるハ。信乃が大刀さ出さとハ。ひ
つるハ。ろけく蘇六ハ宝刀とのひ。ろ〳〵ろとのひ。そ〳〵言
ハ。ハ。顔の色さ変りろ。信乃ハいよ〳〵心決して。父の先見明智を感じ
〳〵自殺をハ止ろふ。由ハ信乃ハさろ。番代ハ智勇の士
ハ事ハ〳〵。志を得ハ。ひろ。珠玉いとづふ。死出ハ埋ハ。名の

口伝ふ送りけり。間結休題。葬の中果しゝ八。亀篠八又蕃六と商量しゝ。
信乃を召とりて。近の人を遣せ。信乃ハせめさゝ亡親の中陰果て
後ゆこそ。命ふ後ひなゝ且く行ゝ世ゝとの。是も亦理ゝるれども。
黄童人八置くゝ。難助八その宿所いとゝ元ゝ多くれ。朝ゝ夕ゝのよもを
きゝ。額義八年紀も。信乃ふハ芳ゝ勝りせゝ。言葉敵ゝるゝめの
ゝ。額義八この小厮どゝ。薪水の労をよく供ゝ。信乃ふ
ゝ。拙ゝハこの小厮どゝ。薪水の労をよく供ゝ。信乃ふ
かゝゝ遣ゝ。ゝ信乃八是ゝ。本心を隠ゝ。間監ゝ
とゝ。ゝ八尚ゝ。ゝ放ゝ。ゝ。火を打ゝ。ゝ。父母の霊牌ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

今ゝ問ふ。信乃へ只笑て答ず。額蔦へ又緑ゝ色の〻ふ指ゝ彼処
なる梅樹の花ゝ新よゝを起はゝ。おゝ〻ゝく些高き処あゝ彼ハ什
麼何ぞと問ふ。信乃答てあれこそ其許ふを去れゝる犬を埋ゝ処ゝのと
ひ。額蔦惜ゝるおめ〻ちゝく。させる仇ふもあらざるふ。去ゝ孤元人ハ畜生ふ
傷けゝるふ田綿ゝ三とあり。吾倍も亦彼犬を打もゝ。刺を去ゝ人ゝと和
君ゝ必れゝとゝるゝべゝ。さもあらざやと事毎ふ心あゝげふ物のひかゝを〻ど。
信乃ハ是ふとゝち笑のゝ。ゝ其の是非をいハゝとは。かくて信乃ハ浴ゝ果て。
よゝゝ衣を揮ひゝゝバ忽地袂の間ゝ。一顆の白玉輾び落るを。額蔦
ゝとゝと留めゝつゝとゝて。不審や。和君ハこの玉獲ゝ所ゝ亦抑亦
家傳の物故由来を聞ゝふ。信乃ハ玉を
ふとゝく。ゝれ一朝ふ親を喪ひ。ゝの憂ひ去ゝるくて。この玉を送れ

たり。ゝれ去ゝの縁故あり。とぞゝり答て詳ふ告ゝ孤ゝ額蔦ゝ去ゝ欽ゝ。数回
歎息ゝ。人面同じかゝらざれども。他人ふもよく似ゝるものあり。人心同じかゝらざ
ども。又知己ゝとゝいべゝゝ。和君吾倍を疑ひゝゝや。吾聊を蔽をゝゝ
是ゝ去ゝ。といひゝけゝ。虜ゝる獲身嚢ゝ。一顆の玉をとり出せば。信
乃も又驚ゝく。ゝれゝ掌ふ受ゝゝ見ゝゝ。ゝゝ玉と一点異ゝるゝゝ。但
その文字同じかゝで。義の字鮮ふ続ゝゝ。ゝゝふ至てゝゝく感悟ゝ
茶ゝくその玉を額蔦ふ返ゝていふ。吾年少く。才足ゝれハ眼あれども
ゝゝゝが如く。足下を認ゝゝゝて。初ハゝく疑ひゝ。日ゝ歴る隨ゝの
言と行を試ゝふ。ゝゝ及ざる所多ゝ。凡人ゝゝと必ふゝゝ。素性を
問ふゝゝて。ゝゝふ黙止ゝ。ふゝゝけふゝゝゝども。身ゝ相似ゝゝ
痣とゝゝ。又この玉の等ゝゝあり。必是宿因の致を所一朝の縁ふゝゝ。

先ごろ玉の由来を説べし。この玉八箇様こゝ如此こゝの事あり。と神女影向のたゞめより。與四郎犬が死と倶しそのゆへどもその創口より。玉を獲さる終よりぐ猛き疾のいぶ来し。支父が先見透訓の趣些も蔽さゞ顕示せり。額藏ハ耳を側て坐ゐ膝の進むを見ざ且感じ。且嘆じて落涙を禁めあへぬ。且て貌を改め。世ゐ薄所ゑるめこゝのゑるゐ和君がうへを変けバ又後ゑのもゝ元心地せり。抑吾倩ハ伊豆國北條の莊官。犬川備二則任が一子ゐ乳名莊之助と呼ゑ。めゝ嘗吾倩が生ゑ。ゑゐ家の老僕ありけるの。その抱衣と埋んとゝ。國の下を掘けるゐ。ゐゝりるゝこの玉を獲さる。ゑゝ来曾有の祥瑞ゐるゝんと人ハゑるのゐゑゑゞ。ゐゞ背ゐ。あゝ。げゐる。疾あるをのて父ハゐるゐゝゝゝ

知とあらせ給を。右兵衛督ゐ拜任せられて。伊豆の北條へ下さるゝ堀越の御所と唱て。諸國の賞罰を掌るる政知朝臣武威ゐ募て民を憐むこゝろ薄く。驕奢と極めゐ程ゐ不時の課役いとゞ多く。莊官らをもく。舊例を援て。苛政を練め。をびく肖象をこひ。絶者の爲ゐ彈れて。御所のあん怒う酷く。珠せうをゝ。と咨ゑ。父ハ主のとくうち歎きし。一通の書を送り。母ゐも。さて自殺せう。時ゐ寛正六年秋九月十日。吾倩ハ僅ゐ七歳なり。莊園家財ハ没官せられ。後類奴婢ハ東西ゐ離散して。身ゐ隨ふものもなく。さも豪家といふれさる。犬川の水涸果て。妻子を追放せられ。母ハ法々吾倩がゐを按て。是首の由縁。彼首の相識と彼此ゐ身を置るてゝいとで悲しきその秋。客宿ゐ送りく霜降るゐ。なもるべきなりゐ。粤ゐ安房の國司里見の家臣蜑崎十郎輝武といふものハ原ハ彼処の豪民なり。母の後妻であり。彼蜑崎を乞あてゐ。母ハ吾倩を扶掖き吾倩ハ母を慰め。辛して鎌倉ゐ赴き安房へ便船を求ゐけれども今戦國の最中なれば海陸の通路さへなく。彼処より船を出さゞ下総なる行徳の港口ゐハ上総へ渡る船あり。と人が絶てゆくハ又行徳をとろさへく。捕与の郷まで来る程ゐ路費を賊ゐ掠られて宿借るべうもあらぬ。已ゝ得ず。村長の宿所ゐ赴き。云云のよを告てその夜の宿をこゝとゝ長夫婦。その殘なりと。ゆ。ゐ接待客舎もいと付ず。小厮ゐさへ叱懲してうけ引べうもあらぬ。ハ切く一夜を柴小屋の裡ゐなりとも明させ給へとかこ口説くゐも許されぬ。小厮して追出させ。門さへ杜て入ゝ。日なをも暮て雪ハふり来ぬ。進退其処ゐ究まく。親ハ音ゐなく夜の鶴。子ハ又擔の寒雀

七歳ノ小
児客路ニ
母を喪ふ
大川湯一六妻
荘之助

時ふ迷ふ行路の艱難強顔さくの八るぐらゐ呼入をとめやとあぶつろ
るくも立在バ雪ハまとくと毋くるく。雪吹ふ五體を吹さられ風ふとるを
破笠の骨まで氷る冬の夜ふ毋ハ固より持病ふ積あり。秋より後の患苦
心労。客宿と共ふつのりく。病著ふとり逼くれいとも危くて元えて。
勇り騒げど七才児が何せんもぞも雪ふ。先ぶ親ハ果敢るく滅て
よのふるを人の員ふ入りハ十一月廿九日のまるり。空ーを骸ふとり著て蹄
天を明せバ。長ハその為体をぞめくきりてうち呟を吾倚を裡面
呼び入れて。本貫を問ーに匿ぞ告るふうちも騒ぐどおぶ毋の
亡骸を重るが如く埋させ。その日吾倚と呂生ー汝ハ毋を旅ふ喪ひ。
べを家もるる。又ゆくべを里もあじ。安房の里見ハ成氏方ふて當所ハ
管領家の采地さり。かれば安房へハ渡ーがて。汝ぶ毋路費を喪ひ。ぶ



門ふく死れハ。葬のゆ何ぞれとるく。諸雑費殿の没残あり。汝今より日れよ
仕へ。勉くれを報ぜハ。久後とてもよをるあじさられ年る月幼稚ー三四年ハ
食損を物の用ふハ立かさるん。ぶれバ年限も定めてー。夏ハ貴布の帷子一つ。
冬ハ小妻の布子一つとてをべ。それを過分の給料といろひとりく。一生涯奉公
せよ。給銀とるせぬそのかえゆハ。養殺ーみて得させんどといふ。時ハ恨ーく。
朽をとるゆ限りるれど。繋ぬ舟の揖を絶よるぞるを分ハいるともいられど。
れより長が小厮ふ成られて。五年あまりを送りふを。ぶれども志農業貨
殖を願ふとるる。今戦国の時ふ生れて身を立家と興さどハよふ男子とる
甲斐もるーとものかくのて武士ふるるんと。思ひ決ーハ十才の春るり。素より長ハ
孤疑ふく。物始とる人るをバ。ぶ本心を顕さど善悪ふ就て主命ふ違ハ
とるく愚直を示せバいとで苛どく使る。奉公の足ふ業夜ハ深るまでゆ習ー

なのもう。ゆるしてくれ。と。肝腎さんは。と。
藤妙と。ろの。ろ。一。腹の。ろ。白。ろ。と。
ひ。と。輪。角。而。と。金。で。金。間。の。ろ。と。
一。生。の。ろ。貧。而。つ。ろ。ら。ん。ろ。ん。
ろ。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。

枯木の春よみがへるべきのこと。神八人の求るゞ為ゝ鑒納を垂るゝ関帝の神慮いとかしこし。又そゞめの二句のところへそる大人自殺して和殿田工、南北より奔走し。命運且く吉々ざるを示しぬり。されば経営百事貫精神。南北奔馳運未新といふり。豈亦奇ゝざるやと。況示せば。額義詞の意を感悟して。信乃が才学の大々ざるゝを稱賛し。且盍く額を拉吾倅へ僅ゝ習て俗字を綴り得るのみ文と学ぶの餘力なり。和君の解せるゝよりあらじ。かくまで神慮の灼然るゝといふべき。ゝるよりあらん。願ふは今より和君と師ゝと。竊ゝ学問を奬人ゝ教ゝ。ゝとゝ信乃ゝ。頭を掉吾倅へ僅ゝ十一歳襁褓の中ゝ学ぶとゝ。何支とゝるゝ足ゝ人車ゝ父の送書あり。和殿ゝ。学んとゝるゝべ。貸ゝ。顧ふゝ人八善悪を友とと。善ゝ善友あり。悪ゝ悪友あり。揮て志同ゝと兄八四海ゝる兄才ゝり。吾倅八孤とゝりつ。和殿も又同胞ゝ。今より我を結ゝ兄弟とゝるゝ。願ふのゝ和殿のゝろゝふぞと。尚き額義大兄ゝ敬ひもゝ固より願ふ所ゝり。や楽を共ゝ。ほどとも憂を與ゝせざるとゝく。艱難死をゝく相救人ゝ。耶もゝの盟ゝ背ゝ天雷立地ゝ。ゝれを聽ゝこゝゝ恭ゝく上天ゝ告。急ゝ如律令。と天ゝ向ひゝく誓ひゝ信乃も又大兄ゝ敬ひ。ゝ共ゝ誓ひつゝ水とゝく酒ゝ擬へ。汲ゝくその約を固し。さてその年の春おを問ゝ額義八長禄三年（大姉自殺の翌年）十二月朔日ゝ生れて十二才ゝ。信乃八七ゝ月ゝ。則額義を兄ゝ。信乃八再拜ゝく。ゝゝ兄ゝ稱ゝつ。共ゝ敬ひを竭ゝ。ゝれ額義八上坐ゝゝ。信乃又頻ゝすゝめ。額義頭をゝゝ掉ゝ年の春おゝとゝれかくまれ。その才とゝそゝバん分ゝそゝ兄ゝれ莫逆をゝく兄才ゝり長少の座八定むべゝゝ。嚮ゝ告たるゝゝ。乳

名ハ荘之助ト。いまゞ實名をつけられぎ。ありてふ孝ハ孝とて一郷ふ伝ふ。
且その実名ハ成孝ゝ。とゝふ由てゝ彼白玉ふ孝の字あるも寔ふ
奇ゝ又こゝ玉ゝ義の字あり。父ハ犬川衛二則任といふ。ゝてこゝ乳名荘
之助の之の字を省き犬川荘助義任と名告るべし。ゝゝどもこゝのはと
人ふ告ぐ元とゝふあゝぎ尺こゝとゝ孝ハ孝とのゝ欲ゝる所業ふ仗て名を汚ゝ
とゝゝふ。ふと問ゝゝ信乃ハゝち点ゝ名ハ主人ふ後ふゝゝ義任ゝ忘ゝ人
めゝゝゝ額蔵とゝふ。ゝゝ芸尓とゝち笑てそハ勿論の
ゝゝ。孝ハ孝とゝ月をかさねゝ起ゝ共ふ世ゝ陽ゝ親ゝゝ
長夫婦ふ對ひてハこれをゝゝ孝と孝ハ吾倩を嘲ゝ人ゝの
如くゝゝ元ハ嫌疑とその間ゝ置ぎ迭ゝ後ふとかりゝ元既ゝ世ゝ
とありその流ハ箇様ゝと難貶ゝ亀篠ゝ嫌されてかゝと元蟇六ゝ
ゝその為体を詳ふ告そのとゝ元吾倩ハ墓了の間ふ陽睦ゝ縛ゝ
寔ふ孝ハ孝の先考ハ人をゝゝの先見卓ゝ行状固士ゝ雙といふ
べゝとのひあゝぎ頻ふ嗟嘆ゝゝ信乃ゝ共ふ嘆息ゝ吾倩ゝ父の
遂命ふゝゝゝ宝刀を獲ゝ腹ゝゝ元伯母の家ゝ同居せバ孝ハ孝ゝ
資ふゝゝぎゝゝ宝刀を奪ゝ難ゝ示ゝゝ縛の疑ゝそのゝゝを
ゝゝふと恭ゝゝ諾ひゝゝハ額蔵且ゝ沈吟ゝゝゝハゝと又孝ハ孝と
久ゝゝゝ在ゝゝ後ゝの為ふゝ翌ハ病ふ假托ゝ一ゝゝ母屋ハ殴りゝハ
孝ハ孝も中陰果ゝ元ゝゝ元三十五日ゝゝゝゝ伯母ハふ孝ハ
既ふ義を結びゝハ孝ハ父ゝけふより心喪ふ服ゝ報恩
謝德の信と竭ゝ何でふ女ゝゝく花をゝ向経を誦のゝ孝と世ゝ
共ふ番化ゝ霊薄を持ゝ。この日のゝ元告ゝ折ゝ跪ゝと足音ゝふ面より

まるめあり。この人八雄を看官三輯嗣次の日を等更ふ次の巻の端ふ解るべ。
他者ニこの巻を草さるとも或人側より図〜く難ぜ云信乃廿壮助ふ
英智宏才あるといへとも原是黄口の孺子その年いまゞ十五ふ足
らぬ。ろ〜俗ふ智辯甚卓〜絶く童子の氣象ゑ。寓言といへとも
甚過ぎ。蓋小説ハよく人情を鑿をりく。ゑる人倦ぜ今この二子
の傳の如ゑく情よ悖るふあらぬどやといへり。予答ていへゑく。藩衣ハ
八才ゑく輝の師ゑり。睾子ハ五歳ふ〜く。禹を佐く伯益五才ふ〜く
火を掌ゑ。項橐五歳ゑ〜く。孔子の師ゑり。いふ〜への聖賢生るゑ〜ゑ〜にて
ゑちゑさいをくゑん。けっせつ
明智俊才億万人ふ傑出を固よゑ風惠の列ゑ〜ゑ〜ゑ〜この他の神童又
ゑゑゑ謝在杭嘗集録ゑく。一編の文米をゑのせり。今毛挙ふ暇ふ
あらぬ五雜俎中ふ〜ゑ〜ゑ八犬士の如ゑも亦ゑ〜ゑふ亞ゑの狡便具ゑ

予ゑ戯ゑその列傳を作る所以ゑ
又ゑ蛮崎十郎輝武ゑ溺死ハ長禄二年のゑ〜ゑ又犬川荘助ゑ父衛
二ゑ自殺せゑゑゑゑより八年を歴ゑ寛正六年のゑ〜ゑゑゑども
海陸の路絶ゑく澎二ゑ妻ハ輝武ゑ死を聞ゑ〜ゑ安房へ赴んとて逆
旅ゑ産ゑゑ婦幼の疑惑を解ん為筆の序ふ自評をといふ

家傳神女湯 一包代百銅
婦人諸病の良剤ふ〜く第一産前産後ちのみちふ助功ありふの産後の乳ゑ出ゑと同ゑ〜ゑ功のゑこの書の前集ゑ〜ゑく載ゑれゑふ詳ゑす
精製奇應丸
偽薬をのぞき法ふ考ゑ製方ゑ〜ゑ〜ゑ家秘の九〜ゑをちりて分量ゑ〜ゑて大包代混貳朱 中包代ゑゑ五分 小包代五分 但ちゑ責不仕
毎月つゑ〜ゑ〜ゑ〜ゑふ用ひゑく助功神の如〜別ゑ能書あり今略之
婦人つゑ〜ゑの妙薬
製薬并弘所 江戸元飯田町中阪下南側四方みそ店向 瀧澤氏 製
取次所 江戸芝神明前いつゑや市兵衛 大坂心斎橋筋唐物町かゑちや太助

大阪
同　河内屋喜兵衛
同　伊丹屋善兵衛
同　敦賀屋九兵衛
同　秋田屋太右ヱ門
同　河内屋茂兵衛
同　河内屋和助
同　秋田屋市兵衛
同　田雲寺文次郎
同　村上勘兵衛
同　勝村治右衛門
同　杉本甚助

東京
同　須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　丸屋善七
同　和泉屋市兵衛
同　須原屋伊八
同　出雲寺萬治郎
同　桜屋喜兵衛
同　江戸屋半七
同　長門屋龜七
同　三家村伝半

名山閣　東京芝大神宮前書舗
和泉屋吉兵衛發售

拾